

字彙集

全 四庫

834-3 (在)

俳諧資料カード

年代	天保五庚午
編者 (筆者)	天保五 〆
書名	集目
備考	青陽帖

(下垣内蔵)

0

図部



CT/3080

和泉巻  
跡之傍

天保五甲午

歳首

思ふと飛人毛羨あくあし

一宵

小松を引くりたる古道

望訣

掛海苔のやまをこゝに白ひく

醉茶

其二

葉を根もさす折るり松飾

醉茶

福招ひまゝ留れ産多

一宵

歩行連花結ゆとるこゝに

望訣

其三

明星や影小中し福雨

望訣



破魔そのの俗を解す掃く

春興

梅柳を弄ひて春を

一杯急いで再び無事

見出に梅を

春水満四澤

東雲や田より見ると

一宵 破茶

方和

餅茶

鹽決

十五未明

天満社

懐ろ子懐よりわたり

春茶

茶子や鬼より海を

急景

皆くまもつり合ひぬ

茶子の像を

年の中先人丸の像

一宵

鹽決

破茶

半房





諸國

到來任

遲速

老後田

半四更

長春菴

おのきこつうし七番伐採  
その七十番をうらむて例  
とすうと半六つあるあつと

今年とて挿

七粒の光り知

五更

厚さつとくわ

とけつとくわ



頼りらにまのつらさのあはれ

寄井

ニミりちまをや陸等ひるむ

梅られむつらさのあはれ

玉石

粘ちりまをよつらさのあはれ

目まらふやつらさのあはれ

李園

吹かけ梅のふんふんささる

ゆきまを抽りぬる汁

いさやうしめ甲斐もあき那梅

芦笛

碩葉

夕葉や美あはれさき

井遊

水浴す梅すか茂の川邊

一本のあはれさき

素雲

梅の仲るあはれさき

雪村

さきや井の植場の丁度

朗都

あはれさき

日向田

あはれさき

半路

あはれさき

あはれさき

秋水



夕々抄ちあふ

ふらぬ方さうり

春瓜

全玖珠

花迎斎

春龍

日面主しるるや梅の風

鶯のふりしるるや藤の橋

家おつく枝のくさるるをたむ

大さうりおきこ越え年への波

解の果もちるるおしるる

魚のつらさるるおしるる

船かつしるるおしるる

春瓜

春龍

具三

不及

芦外

ちるるや片は下階さうり

ちるるや唯克あしと田子たる二

舟馬の車さうりやさうり

色く親世音と仰まひ

咲のりるるん梅は妙さうり

牛子都るるるるるる

柳

須うちるるる

をりるるるるるるるる

筑後 暹日菴

秀船

如件

四別

楚南





佐州勝山  
社中

早カニ此也

百餘年如畫

まろ〜〜

日田  
九六





度中に的山あるをそそふといふはあまた  
さうを植しう古七尺う力か  
是をそそふ今七尺う

大は夢たけ見らるるに  
花とてさかす  
ふくらむとてさかす

春の風乃いつくも出る花

よすはとて孫丈一お袋

馬をさうとておまをぬかす

おるの途なかまたるを

うらうら松葉末を扱つて

かとうとてさうとておまをぬかす



折こ先おとあらし  
水梅所

一雄

梅もたつた

曲つても似合たり

免公

的魂のそらつ

あつたつた

白堊

字をよみ人隣家の旅舎に  
よきと違へらうとを怪ひく

華旦

長流と新しきひさし門の松

舎従

先世よりくけり初被

宗古

吹くやと東風も急も春を去るに

雲外

花も散られと海を眺め

閑壺

春ふると春舟にゆき秋の月

八千房

よつとて人も水掛ふをみ

里翠

多尾まゝと百韻をもちて

蟹のそむき世にわたりて

舎従





扇籾波也

あつた心也

秋意多し

清蔭舎鶴友更

春亭大素



之也先

櫻子家

櫻子樹

三月 養冬果人更

為壽銀櫻左



掃庭方白ふに

高きう葦之那

可月

水花あひひきり小

雲外

雲外

言のたゞ彼岸花

賦のちや城引出す

里翠

正に陸系難

駕の石乃うく走まゝちあふ  
知つて居るさうきそ梅のさ

文鯉

五景

全據和

玉るや連結 やうてちまう

寄笛

隣つち小きくさるに節うら

半房

行旅のまきほつちやまのた

作新庄

如芥

ふちちまふとまきにおくれり

米搥ち掃きまらるる糸





正統のりも

振入ふらふ

一本の梅

全

清容舎

梅権

十巻集

全久世社

梅の影をみる

枕之

子梅や席下あふらん

影の梅影のを移す

梅の影をみる

壺の

梅の影をみる

梅水

梅の影をみる

Alone

梅の影をみる

梅水



めつ〜おめ

龜井

おあそび

おあそび

越〜おの

亀北

おあそび

与衆志あひいお心を

全宮部

おあそびに備へておあそび

都水

おあそび

おあそび

相舟

おあそび

おあそび

渡来

おあそび

全海井

徠来

おあそび

おあそび



備前加茂社

水風に突杖かきき層層の  
世外

雲や小石拾ふくうり糸

初春を吹流して登衣足まは  
笛仙

吟の葉乃あしくもや花楼

松有た又爵

松をのまき音の信  
春の風  
一花

降止る海業三残り  
呼效

彌生十六日

花の流染  
全

嘆山我

尺城





悠然亭

折と梅さよふはなれ 別人

灯の影をさるる梅のむし

美葉のこぼれしつゝ 心夏

志しきあやむる望星の在る

牛の折るるはなれ 富石

葉のこぼるる中野の舟大和川

船のゆく折るる昔の梅のむし 凌杏

葉のこぼるる角のあやむる出葉

まをさるるさきぬ海の浪のむし 鶴遊

葉のこぼるる折るる梅のむし 保平

二つ折に來る細きやうさくら

正算の月見丸のひかり降るる

松山の子を折るる春のむし 蟠松

葉のこぼるる梅のむし

ちとあやむる折るる出葉 潮月



草のむよ近乃いさや猿を智

とや海のおお初りの化ら道

ねとみく隈へふる船は梅の

おとも船は付く梅のちる白う所

江の口に出水きふやねひより

おる次のさうとらゆせまの所

まゐるわ勝の近なりり

おる次のさうとらゆせまの所

まゐるや一船上る伊勢さ者

一清

破明

竹臺

龜洲

あゝや雪くたる月の影

花友

花うく庭に月も金さるや

常やもま彼は乾くねるも

茂涼

あゝこの日のつれくよらふ草花の

あゝこの日のつれくよらふ草花の

あゝこの日のつれくよらふ草花の

あゝこの日のつれくよらふ草花の

まらと何よ無恒のこ夏の庭

全

あゝこの日のつれくよらふ草花の

伊桐



石山

其後高田芝崎社

鏡のまはしりてついでにふもる

霍告

ふちま

かきよきしとれいひりかまのき

内言

歌のまはしりてついでにふもる

折るまはしりてついでにふもる

松雄

さかたのまはしりてついでにふもる

空ふつと様まはしりてついでにふもる

九鼻

若くはのまはしりてついでにふもる

若くはのまはしりてついでにふもる

梅月

若くはのまはしりてついでにふもる

若くはのまはしりてついでにふもる

野山

若くはのまはしりてついでにふもる

若くはのまはしりてついでにふもる

枕月

若くはのまはしりてついでにふもる

若くはのまはしりてついでにふもる

中前真崎

若くはのまはしりてついでにふもる

柳後



春夏

岩波田舎社

梅のふもとのおのふもとあつらひ

梅雄

川越みよをすめりり夏の月

青く

月のやうくしてふりしり梅の

虎丸

橋負ともふりてふりてふりて

柳書

立杖とやふりてふりてふりて

扇峯

遊子宗とふりてふりてふりて

物もやふりてふりてふりて

朝新のつばきをばあつらひ

何有

二夜もふりてふりてふりて

二年頃の春をさす

新のつばきをばあつらひ

奥梅

梅のつばきをばあつらひ

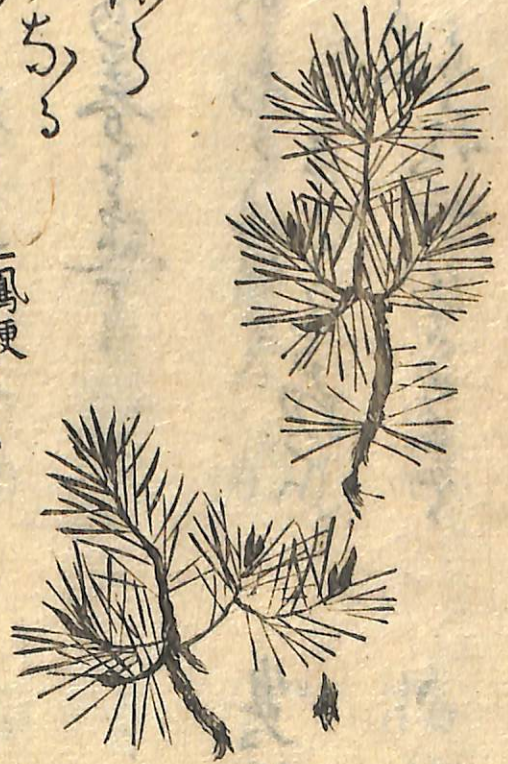
美入子詞初より四の友

八子房



豊後

頭成社



見よ夜に降る

うさぎ

柳を平

一鳳更  
梅窓

秋に梅

善き礼交りあり松丘

大切なるの石口や初め出

一森女

七種おゆせりし屋敷

全

通乃口成流きて

羽人

うさぎ  
梅窓

條えとおや傘下石口先

松丘

落の草葉見たり置く忘れり

梅窓



玄多より飛限して

己よりより末つゝくに

ちりり

別

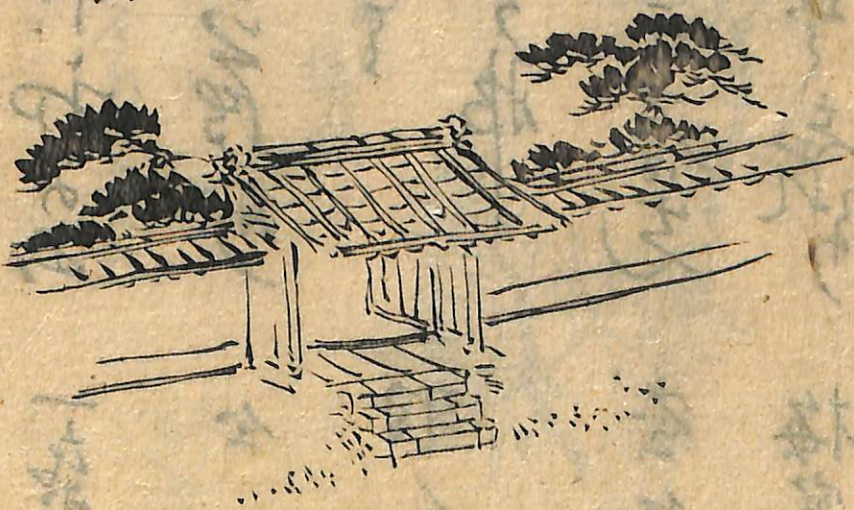
時やまのり

おあら月

右浪華南郊外

杉井莊所

孝後別府社 月巢



版を答ふ傍りもつて

月壺

其後て来りてつた相ふ成実なり

梅とふくしのはるの西より急

先頼

新ありにのみ東の空を掃か

無涯

啼きしるは種うつら此乾きし種

昔や胎のこちを種なり小孫義

みゆ

胎体や子ねもすとなり山とく

初折とまをわ小佐子復り

丁尾

よあや本の神かえりし小乃知



凍解や実ありしを丸き物

伍尺

雪やろくに降りて雪を引

全株集

月名

卯のうぐいすのしづめ

春和

むつしき草をひやう株のま

たれくと葉の伸ぶる様葉

蝸若

そこのおみ梅の叫の鈍るる

松二

門をちんか旭やとをきこやあひま

全三子崇

花六

るのりとも廿惣とらりてまをる

白梅にいつまで残るまをさゆ

全三子備

磯彦

秋吟

全真玉

清みのおと

水と葉か

春坡

あは右

全日田

様

復原にゆくもの管ふ暗月

五嶺

拿とむアのうけしきやう花

あはらまのまへへまや花の巻

葉を具つて前把木



鷺尾の華や花見ればおとろ

山のまや大まきか 猫は鳴きけり

人のまゝに夜に新し 度様 一丸

松の門のまゝくまゝくまゝく

るうちにまゝのりまゝとまゝのま

わがまのまゝのまゝのまゝのま

まゝのまゝのまゝのまゝのま

大まき 彼岸 櫻にまゝのま

六合

一丸

一甫

杜撰

芳宝

福井

宝珠山

るのまゝやるの中より尺八

鳴とめまゝのまゝのま

山鼓とおまゝのまゝのま

蕨のまゝ見つゝまゝのま

まゝのまゝのまゝのま

遠山の櫻にまゝのま

るのまゝのまゝのま

まゝのまゝのまゝのま

まゝのまゝのまゝのま

山鼓

茂蘭

其碩

石露

檀口

オニヤ



蘭英女園

古綿の質よきもの

ふよふいしききしき

紙と床の間の

まをさすくると

みよふの

角に

あつらひ

おひくわ

煮酒菴



懐しの力の長しき春

あつらひのちりしき春

しるたのちりしき春

朝のちりしき春

あつらひのちりしき春

山のちりしき春

あつらひのちりしき春

あつらひのちりしき春

あつらひのちりしき春

岡香

蘭溪

柘里

蟻禁

香燭

遷木



三吟

抱竹の尻に付りし草の雪

踏雪白

飛くま指新島れ芥

吳明

ふきくはきりりる指さしり

蘭和

春月はふきく 雪跡さす

白

一統の海より花さきさき月

明

舟のしほくはさくさく

和

舟のせん何事も花は打上

白

舟のせん何事も花は打上

明

舟のせん何事も花は打上

和

舟のせん何事も花は打上

白

以鏡を任りしに唐うり

明

月をさしりしに唐うり

和

砂山の花は押しぬあはれ

白

舟のせん何事も花は打上

明

舟のせん何事も花は打上

和

舟のせん何事も花は打上

白

舟のせん何事も花は打上

明

舟のせん何事も花は打上

和

舟のせん

舟のせん何事も花は打上

鷺白

舟のせん



七とちの月とまの梅のむじ、中ツ 蘭和

義とちの親子ゆきや齒牙の親、梅石 万里

眼まよふとまの花よ忘れり

夕く神や葦よ、大庭

あれとむせむえおれ、慎我

一はくの殺捨くある櫛踏く形、赤江 蟬臺

今年下るく友呼やまの西、安来 雀仙

山人や離のほろよ海徳村

暇もさし浪泉のまぶたあはれ

浪花城南柳谷乃

事とまろく一きを湯

お梅舟社乃まろくに

具も信す

化されと元も潜るや

全大塚

丘隅

梅のそとれ

回風と折乃へ梅に親と

あつとあつと天保山に

中ふとや照下子

物と十萬家

今



雲 別

母

里

社



暮るや霞散りて雲の裏向

一賜

石もさぬ家も命一花さうり

崩れぬ山もさぬ家も命一花さうり

一徑

さうりや崩れぬ山もさぬ家も命一花さうり

先従ふ草や新波は浅香山

一如

懐あるのさうりや小松や力

東子

長草もやゆきもさぬ家も命一花さうり

一櫛

明もあつてもさうりや小松や力

舟の音もさうりや小松や力

簾雨



南のしづかき流きてまの月

漣のしづかきやまの月

りわすも下駈えく村や茶棧

豆成の泥火煙てしや梅の客

傘がうにぬれ茶をわす吉野川

鏡磨とを棧まきるしちるる

若くしておまのちまき梅の客

移くも梅よまの茶棧の音

わすもあまゆりてたはる梅の客

一知

竹鳳

如月

南美

成眉

雪のしづかき流きてまの月

田のしづかき梅の上まき梅の客

ちまきあまの敷えたり撃つおと

鞠のりうき海もまきし梅の客

招はのまきるるは梅の客

扱や梅のしづかきやまの月

ちまきの眼かすし梅の客

水棧のしづかき梅の客

双鶴

連珠

金風

寒雨



不郎 春

十中くは花見也

七三 清

冬民

あさ節

後をよる屈伸とせあるはま又う系

灌鹿

お練石は乃月まきこもや除おの風

在江戸

付てふゆと大の追ま子 雉子う中

一誠

花の赤く思ふるははくも中

甘栗芭子出子ては花 蕨の若

そ人

竹涼舎

まき節しりるあももまきうつ

春夏秋冬

我梅のやうに

春秋庵

耕文

りる梅のやうに

清 直やまありと

全

あさ節 沈む柿



風折

東蒼館

亮曠

草履

とらふり

花の雨

喜

し

招藉や我

普完齋

眉英

秘の標

見らるに少

全

か





小田孔鶴

雲靜堂

ふたつて  
まゝら

一歸

小田孔鶴

甲午

歳旦

意よく還曆の表を這て  
産祇三社を祀ありんば  
年を祈る

備中

新見

宮めぐり巡りて元祀御

三女房

歳末

古曆 老う衣に引く

古

中引く園を折る 古



草菴

備中倉敷

蓬萊をいつくまに

倭一

やぶらさ雀うお

そなたや月のなみえ孫うら

雲厓

木の崎ま

若くして旅籠のうきまうたや

興りまゝ

肥前大村

初中まじりまゝ

舞石

まなく奥座敷

備前

西大寺社





踏く石

捜し居る也

蕨花 葦屋

春秋舎

翠兒

り丸ららぬ

降るやめぬ

山火 山火

山火

啼捨く

苦なる枝と

響くもく栗

五岳

虫つらや人の

いふ馬れと

竹芽

見えろく 挨拶と

もくもく 挨拶と

あーの草や左右へ多き水と波

駕とわく 新造ふも 初巻ふ

蕨花



櫛をもちて中みえ遠まき柳葉  
 葉の心やれはしらねむ悦  
 出かゝるまの馬の鳴く声りふ  
 子のやぶとてなく抱ひひそりふ  
 夕和のそにほきひさき葉  
 緜悦てりし悦や籠子のそり  
 千海苔よ志あつめくわねの風  
 草の心り方よりめくまの西  
 嬉しきみ海一にるれぬきり

逸水  
 葉龜  
 月獲  
 竹雪  
 三泉

馬刀衣や着有てなるとかの下  
 かきとて流る白のや後月  
 するやの庭や言指のかんとる  
 緯きき葉に絶るる所様を  
 手揃く指く人ありふり  
 浪の被すや舟はれ松の心  
 膝くむきとあひやと保め  
 首玉の入るもくちあいの才  
 雲よりあも身とすまはりり

擗江  
 桂舟  
 鳩橋  
 柳後  
 流水



白ひすもきよのしりあうりあ

月泉

花のなをのりいんあむせし

昔ひくよあおらむいんあやうあ

鳩月

白梅は疎影うつま月影あ

市井

古風居

喜々舞き舞月影あ似きりり

菖翠

友

あまきこも惟るそたけまみか

竹里

あまきこもさつてあふつや物の理を

茄村

西吟

りくこよりあまの夏をきやあ

翠兄

花のつらきにまむい苗代

茄村

加馬の肩籠の地まにゆとま

兄

産あまよまこ一人あおや

村

七たふるれいんつてゆもる月

兄

仕組あまのの通るゆはま

村

角力あまのひ子伏をすあま

兄

あまのあへ隙子例る

村

隣るあまの流る内侍あ

兄



髪うしろのてろまを剃りぬ  
美ゆき這入てんらり一日置  
あつらひとらうらひさしよ丹を搦  
法讀も出練も花はおつたれ  
こやうの春の調ゆるとれ  
並汁を煮るく物く肩やまめ  
月うらふきく東町の幅  
唐薬の弁まきく水に押しきり  
かろつと細をまきく山雀

下田

村兄村兄村兄村兄村

若くは鶴のやうや

北年

又たむし徳利

と葉の野をまき

松

るのあゝ柳系

友達の時を

騎龍

に後れで梅のむ



早春無

全金園社

あつらひにまほしき梅のこ

墨公

一人は通ぬる入

春江

古池の水まじりて

岩兮

よむれいふれいふ

竹塙

山鳩のねをくまへくまへ月

琪山

浪一とふりやうり

瑤翁

門きあひつりし朝露は井つづく

月窓

あつらひにまほしき梅のこ

月鶴

仲人の十ハツ言あは

淇水

彼色と月ちうつる小

樂浪

右一順

あつらひにまほしき梅のこ

竹塙

あつらひにまほしき梅のこ

瑤翁

あつらひにまほしき梅のこ

淇水

あつらひにまほしき梅のこ

琪山

あつらひにまほしき梅のこ

月鶴

あつらひにまほしき梅のこ

月窓



たつふりて水のたえて初の水

楽浪

左義士のさし解き氷うけ

春江

を翻や石のさし言はるひと道

墨岳

さし出さるる所かたも又所

岩手

○

全金川

はるまや程あり強は春才より

月友

さしくえるも眼まうさくや散櫻

全灘田浦

亀嶺

さしふるもや其名福豆此

さしれ海たる上

美谷の家地や

播磨若狭野

一素

七に言はるる

穉子のけりえ

全

琴知

あふりや里の花



増朝の書自秘  
二月の事

全竜野

固丸

うねるや 寺の  
崖の草あり

月形ちり 雲の  
出る二月の形

全

牙腫

昔人ちりよつ

あつちり 氣の角

全明名社

亀蓮

福東風や けふハ多ある 岩間水

ふんちり 雲の  
出る二月の形

明後日のたせくとも 様うね

碓友

神橋よほく 年うら 中り

七つ月のさし 板間うら

鶯岩

連ちりて 出雲の 花の 雲を 系ち

まの月ふと 雲の けふ けふ

漱石

さし柳や 新さし けふの けふ

名も けふ 中りの 中り

一香

月も 倦れ 心 けふも けふも

昔ちりや 本も けふも けふも

千房



龍香齋



門ノ松

子

ふえり

梅のえ



尺牘

ふれりよふれりよのちあしれり

お眼後めの袖とつり経お

旅籠酒のりり水の麻れと角に

障子とあれとり記きりし

猪鹿もかりてあまの月の芽

地ふのうらわちあつたのあれ

人先も秋もさうくはな

くもさのあけり後塚の石

くもさのあけり後塚の石

歩丈

何丈

丈

丈

丈

丈

丈

丈

丈



春のふたねの女さうしく  
 降るふあひいふさすも夏の青  
 月斜さう半部の内  
 さうのむねさうれ 桐を箱  
 ねさうせを 眠さす  
 産くくハ鴨山崎 足さうり  
 素平のさうりさうり  
 妹さうりさうり  
 教洞さうりさうり

下田

院、大、院、大、院

子あいの  
 接いをおもさうり

青梅の  
 春あ  
 かは

又さうり

春あ

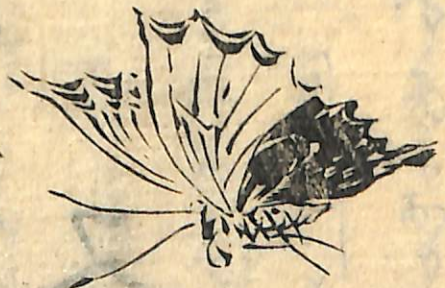
さうり



全四市

乐山

と練の花



人の出あ

誘ひ終る

我者もなれば

又もふいり

又もふいり

又もふいり

又もふいり

又もふいり

又もふいり

又もふいり

又もふいり

又もふいり





草堂歳暮

くまのくま

つえいさる

全乙女

櫻兄

鶏旦

いふふやいくつ

移る雀の腹

全

木植子

全辛鳥

秋雄

おら

持るあさ

圓座

全



宗貞

肥前大村

年徳小教 ある 水 一斗

夫ち ある 水

梅えん女子連

まね ある 水

石 ある 水

ち ある 水

と ある 水

山梅 ある 水 徐升

二 ある 水

水 ある 水 一水

教 ある 水

舟 ある 水 枝 血

父母 ある 水 芳葉

門 ある 水



笑りけりて笑ふも草花畑うら

五山

一も人も多し移せり冬の梅

常月

山より乃遠のいさよし 夕やあ

系書

規ち美あしきくまこくまのうき

肥後熊本

赤らひて禪

肥後熊本

あつゝあつゝあつゝ

龜溪

春の風の さらけは城の

あつゝあつゝあつゝ

梅折る轉ん

草月

あつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝ

龜川

あつゝあつゝあつゝ

全

あつゝあつゝあつゝ

五鏡

あつゝあつゝあつゝ

全



四時

在甲別谷村

菅草亭

夜の様層もえはほし亀

松海

野公いり舟東の雨降

出る月尔船のこき駈哉

雪井のあふよふら茶粥

おねく

花由更

花負く大正れりふ道下

芳谷

杜きり島也ゆき風きり

雪のりり月足は雨哉

神柱乃雪きりてあふ底か



牡丹の巻

徳倉屋敷

後西(あ)や

米丸

初引の巻

出立の巻

春の月

左

植

松

松

茶

茶

左



春の風

玉川

徳而

吹水亭

安の字

行つゝあつち

能登處口

いづゝの糸

樂斎

酒々々々々

さうぢり夏木立

由女

眼々々々々

全ワラ

荷月

志々々々々

全

羅才

越屋山

六月や

葦村

久地と



春の夏吟

和列高取社

昔も昔も帰山は初き哉

八千男

燭もて裡とよぶつや夏は川

松子く引はく見もあけり難

和翠

辟月の綱子く卯の春は後め是

冬も春もよき〜二〇三〇の春

水男

蜀の鬼出魏〜さあは血の春

夏吟

持燈のよに糸糸

ほくきさうわ

林系

川越のよあ子

ふたり茶をよ

富あ

春吟

花咲ける木を

あつ〜こゆる葉のを

松喬



極くきつて  
思ふ

梅もや神内の子

井左

月とて其雄公や灯の  
あとも

米花

ふも夢を  
時く  
燃ゆる

全

梅もよめを  
あつちよの犬

好月

松の根とく  
まれ水

全

春無

阿波新唐社

梅白き朝や  
酔の利柿繪

洞花

舟もや  
新くもあつちよの梅

人西へ  
花はさうりくも

面水

梅白く  
月を梅もあつちよ

まも  
あつちよの梅もあつちよ

一笑

毒白く  
梅もあつちよ

夕浪や  
梅もあつちよ

全属岡

一晚

嫁入る  
梅もあつちよ



春の興

伊予大洲

状一り深き山に梅乃夜

浮舟

雉子鳴きや小丸き山此節の夜

輕舟

新くさききし梅き丘の夜

赤白く梅き山に梅き丘の夜

歌遊

赤白く梅き山に梅き丘の夜

梅き丘の夜

化友

赤白く梅き山に梅き丘の夜

赤白く梅き山に梅き丘の夜

四時

伊予宇和島中庄社

七種乃ききに絶より浪のき

花月

君の代より小松引り

露笛

是よりさき夜に梅き丘

西柳

柳より初まき梅き丘

文室

梅より初まき梅き丘

松梅

折るもく目よつて枝や梅の花

露艸



蘇東に竹屋... 小西の形

閑雅

唯りんと梅窓... 七葉白

一雀

結をわぬ人のせ... 合衆の心

南洋

山みよとあ... だる旅

藍光

一寸も動かさ... せいのくち

雪溪

見らうちに板... 門に夢

昊天

右

日向

延固社



弁棟ふえんも

志まぬまの身

ふとあるとる石

人年か標

四時菴

亭



第百乃一日

夕に春の雲

三路

新しき新しき  
月に柳を

全

松の枝を

うらりうらり 軒かく

五経

明切なる

心也

全

無因

居轉ん

るや初

壽成

おあう

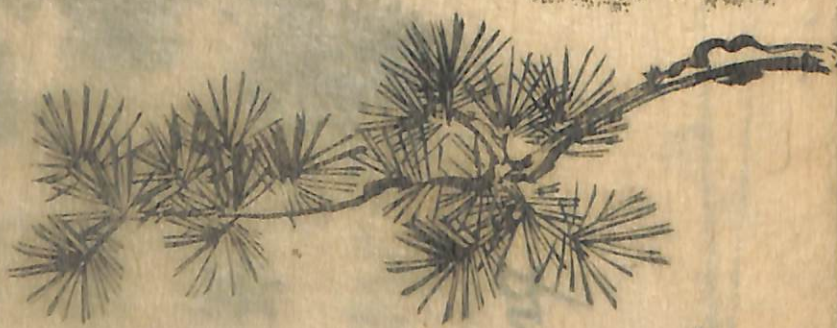
下駟

帰る時又

百丈

一めく

梅





石蓮花之根也

明子之根也

龜人

水之足之聲

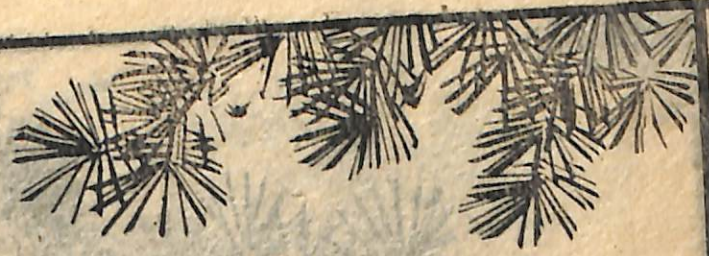
儿湖

持竹之聲也

古石之足也

瓢光

竹之足也



かきつ

かきつ

かきつ

かきつ

其石

其石

かきつ

かきつ

系柳 楚雲







鳴る

人のきこえ

橋倉女

うさぎの花

春の鶯と探姫

世草

色も雨道



恒ひとらやけとむ外舎

さうらう

復升

京の糸巻となくや馬仕上

文友

蟹哉と喜ぶやーやをり雨

亀岳



養道を原へ

けうけつを流る

竹太

折るを梅も

美々の恒の角

萬橋

る才格好

以返すやうにふふ

湖月

か島乃くまはちあふ蘇糸

院島

涅槃ホリ

五木

茶のあ

鬼生菴

やみ

隻鳥

礎き

八子房



かしらふらふらにわらうてしほ  
 言しれほそまふらおるを時  
 人の心かゝるや 師田  
 隣りのまをふてしほまふら  
 日 歌 翁 丘 梅 窓 院  
 月 雄

文る夜に別ふおわらむあのみ  
 何ら懐もあきわくさうまれ月  
 葉入やりのれあきさうはより  
 志道よかしくまなれぬ本あは  
 風一 おか梅まきうふらう  
 ちあまのちあまのちあまのち  
 ちあまのちあまのちあまのち  
 ちあまのちあまのちあまのち

樵笛  
 湖衛

竹谷

学芸

居影



高徳ふ吟日なりておまのり  
警者  
 松を敷時けり追りれり  
琴糸

半志うらまゝしや平のるれ井  
全致口

初らあ。砂みちるる  
 花表う形  
文水

春のおちおのりつあ  
 ちまはるる  
全

桐の下駈用きこに  
 空く杭のむ  
半壺

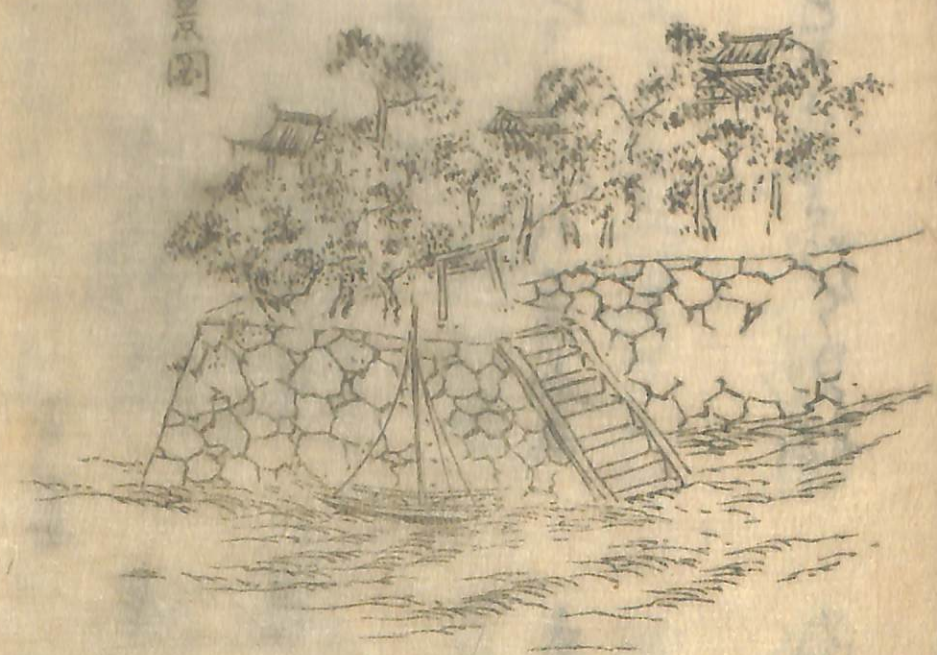
不瀬や切く  
 心く此面白し  
全

冬後

朝暮

社中

川口鎮守風景圖





正朔

・菊水菴

勝る俵我より新子嫁の辰

亀六

鷄の雌雄むつりし初の新

蘭什

芙蓉の筆画に

時をくぬふ山とるんはくを案

亀六

○

二はも流をくぬふ花の私

蘭什

竹をばむるく惜むる西の花

自来

串の籜あつてをば梅のか

磯舟

熱の接くんにたり柿此枝

自来

追れも猫みしとる梅木此

磯舟

指くもて置とやうなりおの梅

露笛

近より垣壁の花の辰

三穂



追々く磔投たり 雉子の色

露笛

雪のふりゆく 花かぬ男ら

三穂

流るる錦り 梅の白ひら

一帯

夕ぐれの坂 石いそく 梅見か

春あの花 忘れぬ 白ひら

竹太

路次口ら 雪残る 春あめ

鳥孝

たつ今 咲と

亀水

色かぬ 春あめ 花

石口すく 花

松人

草薙れ 春あめ



四五本の松も春あけ小窓に

富月

春の月小松もさげ通る余

梅里

心まをれ顔そふ也梅花

若帆

出さ神とつ先の前ま月

陽和

揚る見る

富月亭

巾を糸にたれ

竹秀

巾の弁

走る雉子曲る

流水庵

床友

巾を

糸を糸



傾糸を換く

百葉

春糸あふ哉

梅丸更

巴鏡

推量に遠ふ日

あやまると春糸

春甫

啼止んふ雪に

春糸會せり糸

夏詠

高田

炉菴

月山の刀

炭折

かやる糸牡丹花

まきり

梅くま乃や糸

月光

とちれ糸小神糸



義付与々

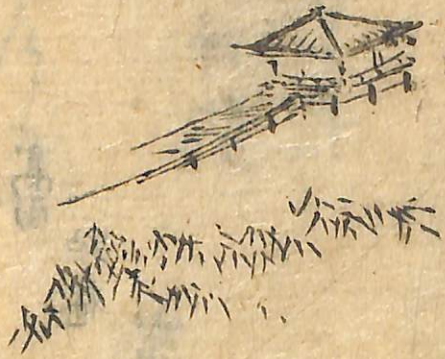
清風菴

朝羽卒

白くま

ええ近

青目山風



初更をいよのけりて

全犬飼

梅父

うまの花

浅くは花見たふり

ふり

全

松乃谷あり

全

菖山

あなま松のうけ

白筆のこゝろ

まの雨

全



子春浪速の  
川口平船冬

全系浦

新しや天保山此初雪

琴水

初雪や子にりて勢も狐面

湖雲

全門田社

鶺鴒を神代の名を野郎

富潤

梅折る枝のふり見さるる

蛙文

全大田

馬より見えしや春は景道

車牧

白鳥の居むと追ぬ二月

牛丸

梅又のあらで見えしや松の寺

雪人

子又や細くもあはぬ水の中

玉水

まゆめをろほくらの水の上

馬佛

花の中をみればはるるを愛

千房

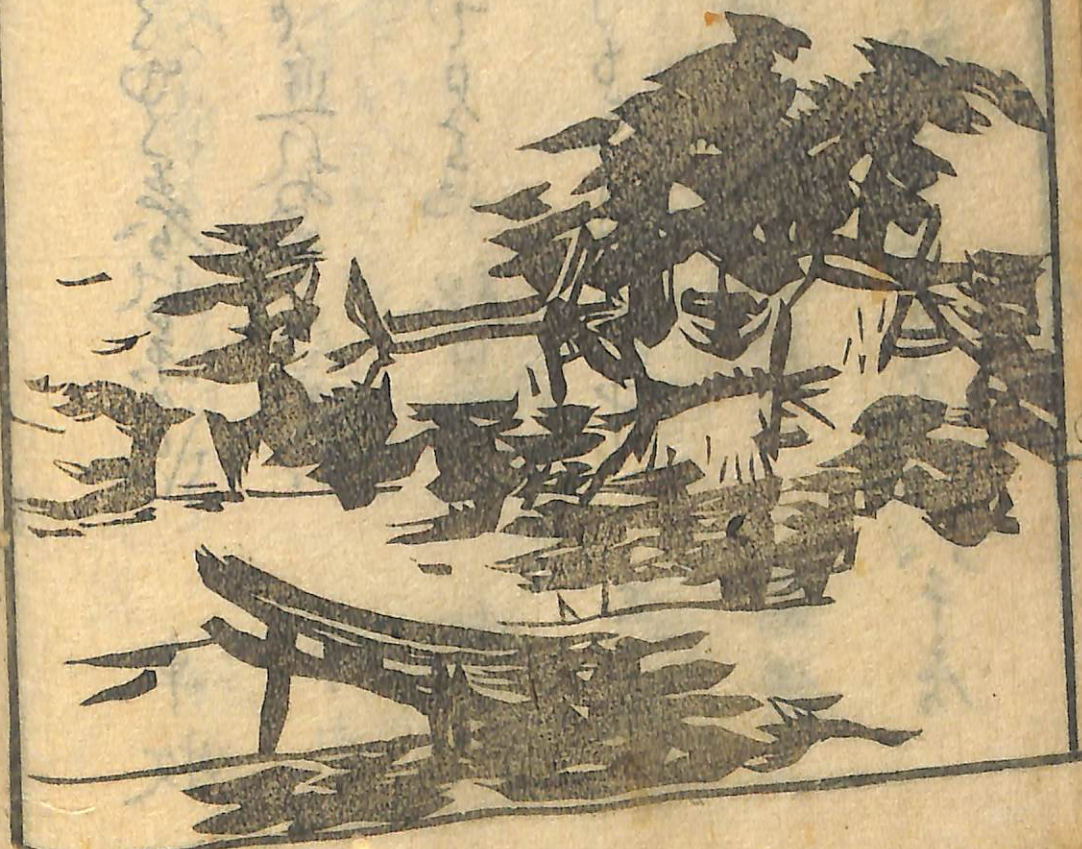


豊后鶴崎

大在

住吉

社



仙道通より花押此  
免状あり一一年

方寸もあき書き終りぬれぬる

東ゆよ志めりけりる東ゆ

何時よりも書ゆけたんとて

かり揃うるる子更すりたり

紙詰てせぬぬりすす聖の月

心の柳たきをくくも

海よりも引月の光る秋の夕

抱くもやそり呼出ぬ方猫

竹替てさつり燈の灯と志めく

駒  
御

三  
鳥

李  
雄

心

心

心

心

心

心



佛おむもかたけ言にけ  
 喰春も何ら情愛ふと年りは  
 昔らり茂るもの峰を裁月  
 梅隔もまらるるこれ低る和  
 茶碗の水をひきす手拭  
 松脂の星をひつゝ表掬  
 芳りぬる香枝のた下さき  
 無年貞のたよ世帯をたおひ  
 手拭の香の味ゆらうる

香 口 旋 香 口 旋 香 口



奉賀王父八泰

八十生辰設壽筵  
 綵衣相映德星懸  
 常探景勝耽琴酒  
 北遊喧譁受石泉  
 東砌垂楊當檻媚  
 南山淡靄接階鮮  
 畫圖松樹千尋色  
 仙鶴同栖幾紀年

たけき〜子代の

たけき〜を松枝をれ

孫

杏雨



雀の巣乃ニツヨリふり花の  
 虫の夜ハ十階の水もふらふり  
 万葉の花の敷や虫のそれ  
 雪車し〜〜〜  
 春の風や古葉も又せぬ庭の松  
 虫の夜ハ十色あふ〜  
 雪の色を其色みして松の花  
 西面ま〜〜〜  
 人の〜〜〜

机紙

竹雪  
 虫推  
 青泉  
 三鳥  
 挂鳥  
 渚鳥  
 駒御  
 竹雪  
 青泉

まゝ〜〜〜梅よありぬ女々布  
 伸る〜〜〜  
 海へ〜〜〜  
 一休〜〜〜

横高松

渚鳥  
 挂鳥  
 虫推  
 三鳥

竹炭

八子房



豫

州

宇和嶋



素亭

清幽廬

素亭のてしる

素亭

花紙折紙

夏紙

小学文

全

舟と楫



まねや志

さるる湯水

あはれ

各醫者

あつた

う米の

九二

雪

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

花鼻

梅鏡

花謡

蛙水



福山社



是雲寫

髪をひき連るるくさねの音

、 桂舟

山さきの浪を志すおや 雷の女

えおねや人も儀なき 晴るん

、 柳山

祖父あまのひりくさやまの雨

、 三支

下枝を層層の中やあはれる

駕をわき草挿け 髪たると

雲のふらねをまよふと笑ふ

、 明灰菴

襟をひきえおむしを解け

、 月号

髪をひきおむし波やまれば



魚子丸のりまに  
一九

ゆつやまをみる

真のゆめくみ  
礎書

つたふく宿うみ

舟楫く余はま  
一塊

舟楫く余はま

木のりまほら  
吉哉

木のりまほら

作陽久米南山社

立り尻に人がりさす雛子か  
益彦

る保の世にさあちる櫛

船中のあきらさふく赤舟  
千流

生蟹ろつ平白ちる櫛

舟うらまのさくらんく花  
流亀

如月のさくらんく木の間

田時 孝後佐賀園社

遊ふりささきて置や梅の心  
田雲



君の代やうぬあれたる始  
 家三軒をさうにらして梅の色  
 糸鳥をさうふりしは路のち路  
 しくまきち名のみく梅の  
 雲とやうくうまにわさふ  
 笑ましくもあはれあり梅の色  
 ちんちんおのしー白湯や小豆粥  
 子のとくく丈と折る花あふ  
 眠る子の民叩きいふおま

季月  
 芦飄  
 雀友  
 静渚

七言 蕉の看画



豊後岡社



着るものに乾きつゝや水満至  
路方

かきまわらばらむからき様々を  
一顧

終る事かき大さむゆき人の  
其水

昔まゝにうらむくぬけはふ  
、

まゝにふゆきまゝにふゆき  
、

五月がまゝあゝふふふ  
、

中まゝにまゝにまゝにまゝに  
、

栄たてたまゝに夜まゝにまゝに  
、

出代やまゝの田もまゝにまゝに  
、

門の芝焼やちりよ此後(市)  
瓢也

木瓜折く磯上の塊りかゝり  
、

いふたあり石垣けり引せり  
、

白の内まゝのまゝにまゝに  
、

何まやてまゝに格あり茶臺  
、

かきまわらばらむからき様々を  
、

まゝにまゝにまゝにまゝに  
、

まゝにまゝにまゝにまゝに  
、

梅と月まゝに障子もまゝに  
、

在田窪崎

全村集

全佐伯

一松

菊厄

蒼生



素足も山崎のふむるあふ  
石ころもつ子のせむる懐

畑のうぶさく追とぬく月うら

芝木の花乃るるもあふぬきうら

焼室や目らるる此をくらう

大道のまゆ中をよめる棟うら

るる石越やや雉もれ一志さ

似る指子や一とくやまの目

猿皮や猿のうられ又さ

牛丸

樵省

丈夫

其石

双門

富士玄孫

木兄

とんちん

あつらふおとつ

富士の葉

子久お毒と

〜の毎朝

起ふつ



成章

浅井菴富士



香後緒方社

幽山舎

巨井

子方 鶴 水

ふつとふえり

ゆきをたふ

ふ谷 見 句 あり

ふつとふえり 梅 枝

若 谷 あり

全

揚 子 あり

命 の 大 小

端 あり

松 濤 軒

完 翠

沢 山 あり

噴 石 あり

梅 枝

全



我影を

おろし

居るまゝ

猫は忠

枕流亭

山水



己う名を吹や様ありし

見し名をどねくたさす梅の忠

人の事乃能接ひ多初様

揮筆一跡するや柳々草

首ねく居る事りあいのを何

とてえて見せしと云ふ事あり

小ちみも似合ぬ株の事あり

実牛の首押して居る梅の忠

狸の脚を著ふ引つる梅の忠

曉齋

可然

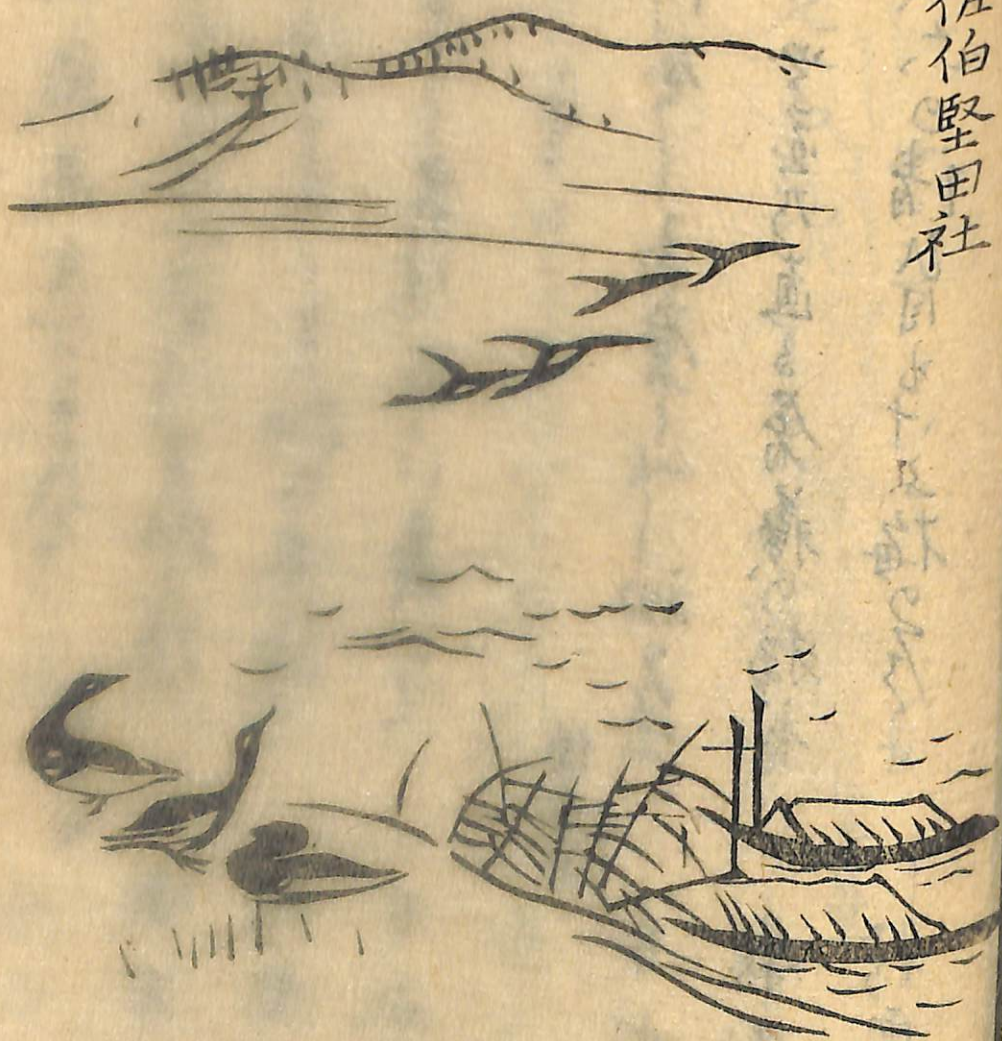
不崩

巨川

孚白



豊後佐伯堅田社



野村

吳竹立

笑ひ込り来

平水亭



歳旦 立几のまゝに

環井園

美草染ふふも柳きれり那

漱石

浅くくろくもやう松の歩降

樗雲

執事くも雲陽安らに春轉ひて

其水

二

謙亭

仰身一玉磨く一初りの出

其水

世並乃直る屠獲の移り者

漱石

双六の清ひ目九けふ梅の夕よ

樗雲

三

仁壽堂

えりや神とまらふ橋の上

樗雲

さつそく旅のそねる正月

其水

古くまに染れ名可くおふん

漱石

二

掬ふくもくも風の柳をか

其水

さつそくや福扱ひまふれ

樗雲

庭めり山里より一まら月

漱石

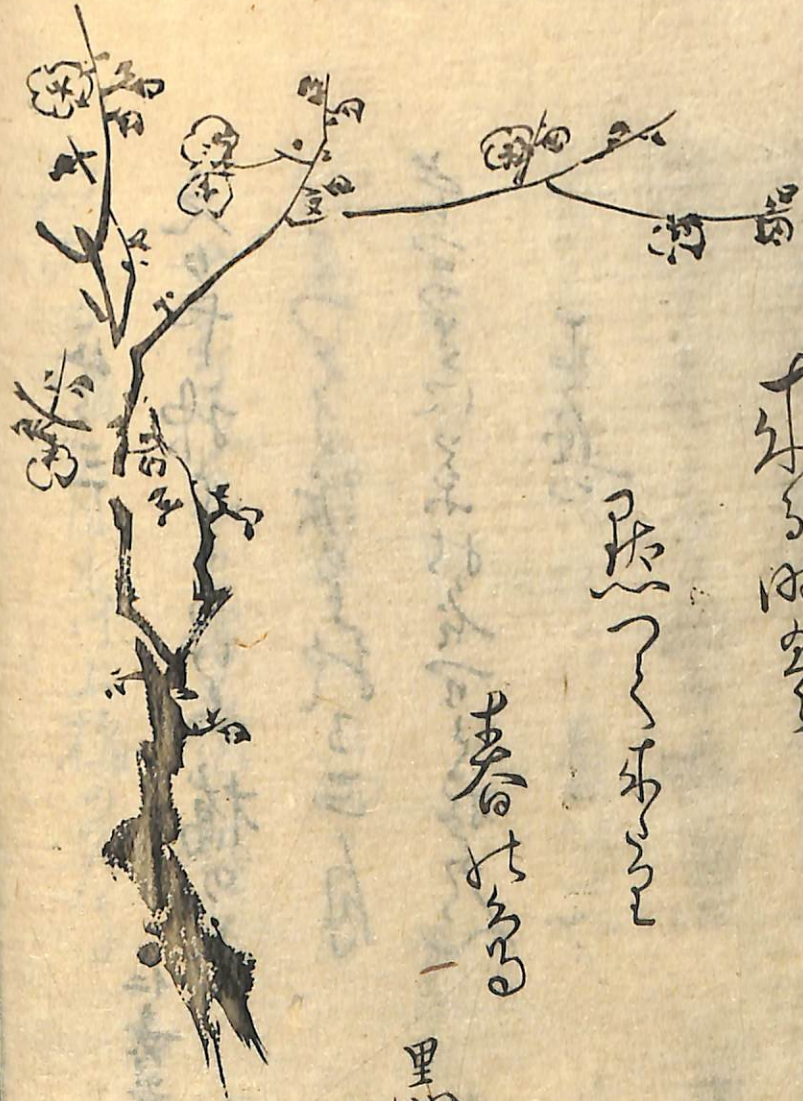


あつたとき

あつたとき

春のうらみ

黒人



石風名の下を留まればのき

其例

花の後に子孫のつく花見え

官竹

まをるやわらうものをおもはる

志み女

解標の里あ遠れ山崩れ

里志女

眼と山後一と山乃さくら

三者

松のうらみやわらの引る難木山

里魁

散りや鳴るる油土

榎溪

散りや鳴るる油土

榎江



余の葉に帯  
交の椿う節 花文

葉吹く青次此

廣間ふりせりり

まきや大尾 積水

とけり賊り癖

ゆき子よさほく

うらゝ思案りか



慈父古稀に  
祝筈を賀して

老る程程

葉のやうに松にたれ

古無

葉の程いつ

嵐をく春は風

子存

可弁



何よりあくる花も山家山

林く

柳く柳くまのりさ 陸く柳

空やうとあまのひうらなを

柳栗

寛く見とふそ寄る少梅柳

水音もよくゆうちのうまの核

見極くあつぬ梅く紫

微笑  
蛙水

井の末に波く指くまのり

初秋を相の二葉あまのり

一黒

腸を人平

富州

~~~~~

花見の中

春雨也

全

僕の私記

高軒



雪三秀楼



解音

杜若

田圃

孤雲

伐

山



村中あり田の傍に坐し

巴溪

中々にてまの如きものや産む

麥仙

耳順のまをよみて

秋石

雪三秀楼のかわらぬと見えしりり

雪三秀楼のまをよみて

ありあけのまをよみて

八房



三代頼朝御書  
籠玉うけ入持

穴のつらき ぞとれた下もいづれも色

今平さぶろふえ 足利の白

大さうの 桶の塩梅をい出して

ちよりのとあさうへんぬ水次

ひつらうと 成のぬれも 月が思

きるを 遠にとも乃好のり

せまのの葉をの市に欠け行

結うまつつくぬあか力中鏡

成程あか納り初も 桐の灯尔

孤雲

雀門

中

門

中

門

ぬいよりのぬれ 飛より 乳を吞

け雪のげとあん白 積ふや

ちうちう 甲へ 齒朶送る月

掃うちう 四葉て 夜にいつより

ちうちうと 足さる 巾袋の顔

よ俗衣長れかおりに 出さる

丹後丹波をい 癖よりの

ちうちうとりのく 行浪のともむく

岸の舟白子 棹のこし色

下四

中

門

中

門

中

門

中

門

中



お歌舟三人のまじを祝す

各々文あり甲斐す

江天舎

山吹の舟をばよしく風をよ

宗休

山吹花やル備への艶しき

孤雲

風流の給きききし小をる

樗雲

月もよきききききききき

黒人

床しきききききききき

微笑

淡ききききききききき

麦仙

日の影にれよねきききき

子孝

降雪よあやぬ牡丹の糸性也

可弁

山吹月のまきききききき

巴溪

つよ心なく雪踏越て月を

耳水

暗おて隈くききききき

其例

山吹花のりききききき

官竹

月雪と汲取る道のつき

尚水

時るこも子代をんねきき

芦舟



月清く及りけり梅もなかり

花夕

芭蕉の糸のちねえくろの月

葛葉女

梅もえつ仕くもつ雪の白さ

里魁

山風の石菫のこぼれく白ひら

里魁女

白くく月さへく水仙花

三省

梅も春に友まはる花は雪都

楳溪

師家より立元花は梅

大

梅も机えりしお時雨

漱石

梅と春とは是れ

真のこも留まはる那

只物めとら

梅のやせ

ふりやうの雨

ふりやうの雨

者

佐伯文紫



三節

左江天舎

宗休

明のまほほにうらやう悪と嬌  
柳柳とて揺るはるる有  
畑歩や午時飯屋ふ土佐の上

伊予松山

招見えし  
誠を牡丹那 菊人

名山のまがし

淡路

と連のふくしりよやもの中 素尤

南部盛岡花輪社

誰者もすめに

明きり君と

東岐

白梅やをさ

りてと老樹あり

全

破さあそと

ものあり

蕪城

青柳や素履か

りたり更け後

全



淡雪や ぬきまれば ぬきまれば 今 鶯路

まらば 指ささき せつ 今

松風の 掃ゆ ぬきまれば 今 鶯路

三日月よき ありて かく 陸う 今

美草の まつ けし 伸ぬ ありて 今 寛棟

二三 新まき とも 里や 幸 夷 嘆

舟後田辺

北亭

白く ぬきまれば ぬきまれば 今

田家子 抱ひ

阿波

糸山 糸山 や 糸山 今 桑岱

糸山 糸山 や 糸山

有馬 有馬

二の 糸山 や 糸山 今 陵岱

糸山 糸山



細溪菴  
漫遊

呼了返り

春了雪の道

備中菴

春了雪

春樹

あまの道の外なる花

武庫

墨巢

舟の舟各目より

北窠

夕立にきつる月

半山

半籠

左海

僧渡り水流るる紅葉

成風



牡丹の種あり友人理長の家より花  
 一百五十余を写すありありと花  
 獅子牡丹といふ花は三三余  
 あり実の柳子に花散すといふ句  
 あふ

備前建部社

さつりつ

麗くま

麗

牡丹の形

入相を

あふ

三石



傾く真

南嶺

向ふにあふ

牡丹

形

笑く

牡丹の枝

実

其鶴

徒加つ

門

梅日

牡丹の



花の

の

の

の

文籬



敷入ん

大田

多々

梅月

青丸

牡丹

匍匐

鶴の足

本多

馬

牡丹

牡丹

牡丹

紙工 亀言

人の世

あまのや

糸竹苑

起し

理典

夕

楚狂

牡丹

八子房







浪  
華  
葩

見えてしう花  
 余程細くもや  
 秋  
 子あるも牛  
 引るやお路の中  
 嘆もせぬ  
 梅の末  
 神者  
 播列路  
 浦秋  
 豊后国  
 五鷲  
 筑前福岡  
 宇逸



梅檀社

東林舎

七夕や

望袂

飛鳥折殿に

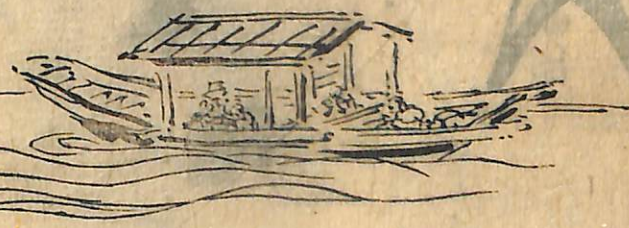
鞠踏り

琴の音あり

遠く飛くや

天竺川

紫暁



天竺河不二銭

松子

中々さうさう流るるや

星合や櫛子

雄仙

あさき 女帝花

七夕や籠子

一春

春とふ小盃





大道へ概軒 松山

後多也星之智

月一系名 光月

とやい通ふ

席下之草

七夕に擇り 花調

層少あふ

真素瓜

春日夏

玉水社

海向亭出張

素雀

后多也山名

夕顔也夢了

模立

山名也下男



能飛く

高橋社

比みくちやうなま

申調

やちんりや

持やう

おぬえてのま

佳橋

牡丹

東穂子

かきむ村社

梅十九

まき系水

二有ふ

まき系水

里果

山家



美餅あり

教とくを習れ

うきうき

駝犬

うきはみ富永く一年

信柿の美芽葉ふて新茶が

喜木

鶴もねと格ふたして春の海

東の風は静か

市の價りふりいさやとる鯉

アミ

尺

手交しておはまらうすを見哉

月挂

志くくすま先く美所の籠

一肖

糖賣をくくく一牧降をく

挂肖

ちんく求柿をくく持せ

肖挂

横所をくくくくくくくくくくく

肖挂

ちんくくくくくくくくくくく

肖挂

くらくと吹矢のそつ山西院夢

肖挂

七人の子ありまうくまうく

肖挂

下書



十世の西下

鳥流

さあめようく

ほろろ

菜まゐ

ふり



とろろ

丸

移ろや

春の水

紅琴女





粟社

加馬三行

被者

只々々々

被者

女羅

荷馬引書に

起る家二白の如一居



十んもつと橋孔

中色在る哉

守一

かゝるもつと家麦草

向一五月書

呼友

朝のつらと

と神私書帖

三松

指越一子日記

あゝ々々々々稲田畠

芳竹



在東武

和暢

ほろろろ

目ふゆる

磯や

うまの花

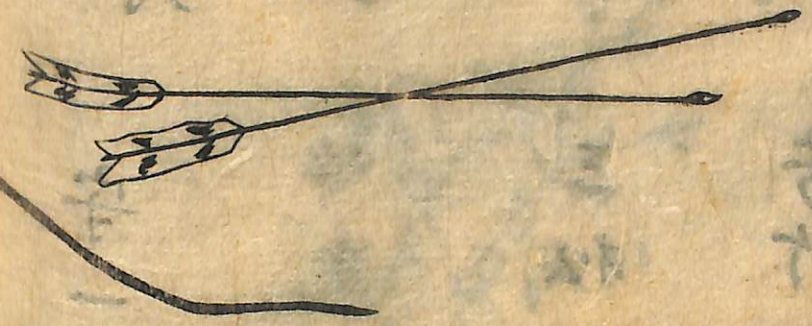
雨ふり

庭子

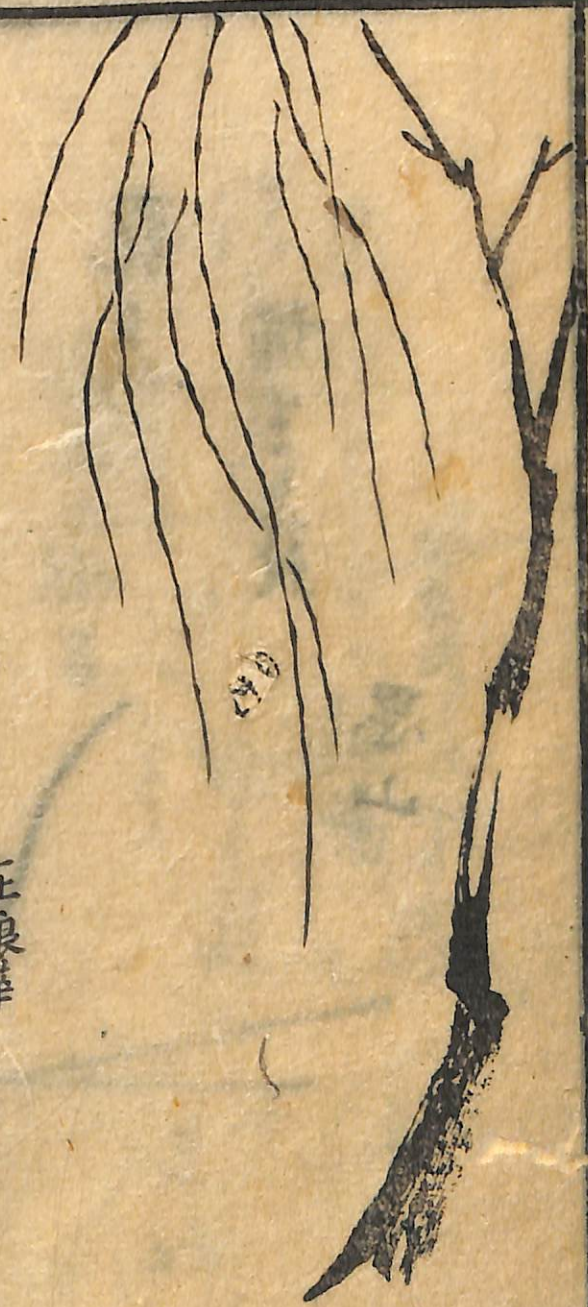
艶ら

彌生うね

思山







子子星の梅

在浪華

秋田藩社

蝶齋

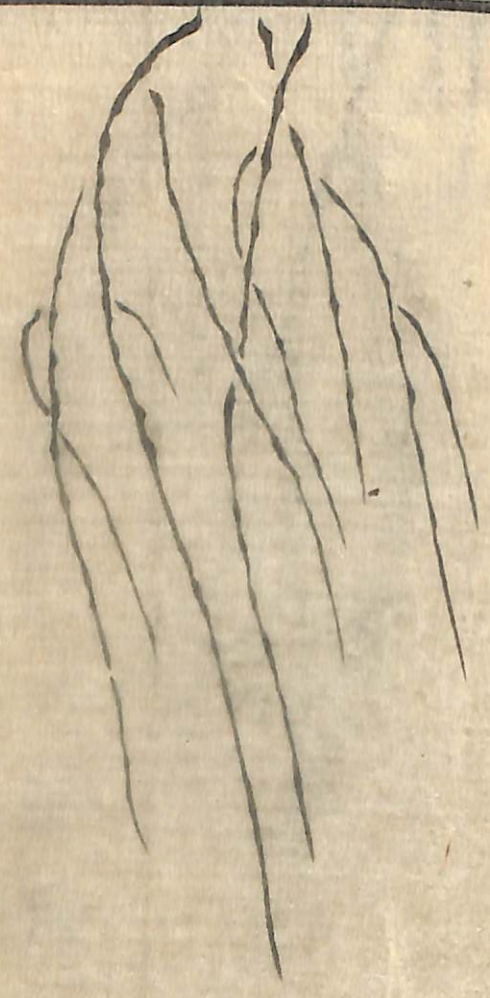
砾や春此う勢

盃を取

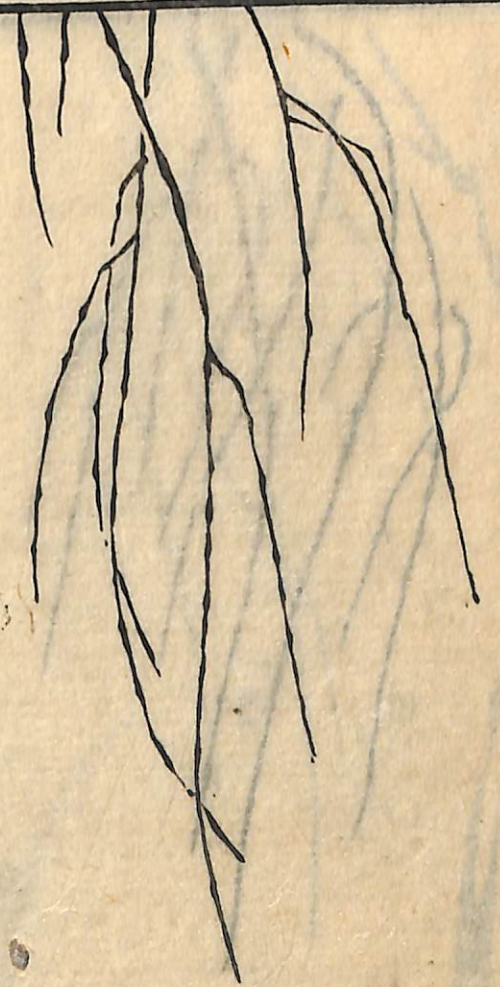
ふふふふ

木印うさ

雄谷







春の柳也

笑ふ

一花のり

國彦

昔の洗子舟のり

谷交をり

舟に

出芝

北路列



行きの果也

己のり梅柳

菴女



久苗米藩社

中津屋とて言はれり

無義氏

よめる友好ある

菖堂

春分北西

燕や心乃とく〜船と陸

下村氏

文老

多の子乃るる〜

四月末

全

二つ又もふ立

見長る湖ある

舟吹

之ふ〜死なむ

故事〜此石は

湖童

出〜せ〜切

舟〜馬と丸

難辨社



ちりり

花に上

九瓜



花に上

行遊々あむく

古友

梅に白糸の形

西北雜喉場西社

毒一本ちや

三才卷

くちやあむく

古来

水中花

海子入日画

其有

大まきちやあむく



四五の

猿に飽

陸う那

桃年



まふいよ

虎尺

高の調子

雉子の聲





嵐山子抱ふ

文行や洲の

紙も花の中

おろし〜

あつ〜とと點も

其ま〜おのむ

遅竹

烏白

綾亀の 孝棟

根もた

ま〜心

ま〜うま



春のゆや

あ河〜りり〜

真山

豆の湯



水の志む

まろくま

清き

椿うね

落櫻舎

其山



みち無

葉を舟にあてりやう川大根うね

水節

青隠

まろくまに重く里に如 春

自楽

押さふの七の入り子ふ年暮り

自楽

みちん小紋のきんぎょあかき

自楽

るも心月足氣越口上平

自楽

山ももろつて廿年の名自由

自楽

せつら〜胡弓の仕切を首あけ

自楽

わらわらけりて早れり

自楽

丸縫ておと美〜と美人と云

自楽



大さき中のそふ子皆此名を去  
 約束と違ふ十百様の植木市  
 あくうはくくはくくはくく降  
 昔はちかたとある所の月を  
 至甚の店を替つくと組  
 根来方おちよと負子持まりて  
 吸くくおとら又かおする  
 こま大のわくお枝くくをとり  
 多量の戸にさるる通り矢  
 下男

楽 優 楽 優 楽 優 楽 優 楽

新 々 々

在江戸

掃雲堂

藍外

清い心多神也

ありて道





惜春良興

新まきの節のあつまにわらうらう

竹の子のしほをさるすくす

梅のよ雛の酒盃とつるあて

何とあやう草のせんさく

五七丁先んさるら月夜色

鮭の通るうしれり捨ふり

秋をたたりあてて人籠集

雪の刻ふときける響け

下男

眉岳

一省

岳

省

岳

省

岳

省

いつの間にか

遊る

は少なきや

えいせいの

新まきや

を井ちりる

歌まじり不潔

あつたきや

たみかきや

まきの雪相図





雪月社

裡承とつ提  
酔茶

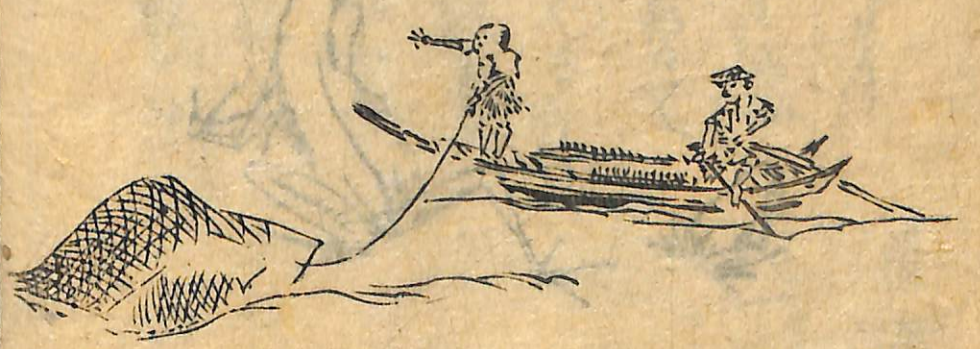
ふあふあ茂るふあ

難立史の邪  
山霞

かく提りり  
さそ味附

うまのあふ瓜  
史友

集る見海に集



川海志の板子  
三巴

あつく暑さうふ

旅承のま下に  
都孫

帰るまう流るま

江隣釣ひふに  
青葉

出さう交せ月

州裡ま指さす  
友之

又ま帰る集







まきしきり著  
さる志しに 離るる

踏先

離るる 離るる  
まきしきり著

雨風

形代のうき  
かきく小魚か

萬二

葉の花子川玉條矣

松考好

つむりりり

冬嶺

松のうき

義理の山なるや

一程園

松のうき

文鶴





海を記す此

中に梅見本

左社をく見芳

枝やをさる

三夕月に花

余情を披

六

千尋

花溪



